

ベルトーフ 『子供のための絵本』 に描かれた自然 (1)

—19世紀前半のワイマル公国における
幼児教育についての一考察

富 山 典 彦

はじめに

この研究は、2014年度に成城大学図書館の貴重書庫に納められたベルトーフ『子供のための絵本』⁽¹⁾と、それに付けられた大人向けの『解説書』⁽²⁾とを繙くことで、1800年前後から19世紀前半にかけて「子供のための教育」がどのように展開していたのか、その一端を伺い知ることがその目的である。

貴重書庫に収められている『子供のための絵本』は12巻になっているが、これは最初から12巻の書籍として刊行されたものではない。現在でも週刊誌のような体裁で販売され、それらをまとめるとかなりの分量になる冊子があるが、『子供のための絵本』はまさにそのような冊子として刊行されたものである。1冊1冊は図版5頁とその解説5頁、合計10頁の薄いパンフレットのような冊子だったが、これを所有していた人が12巻の書籍としてまとめたのである。

巻頭には「ザクセン＝ワイマル＝アイゼナハの公太子カール＝フリードリヒに捧ぐ」⁽³⁾という献辞が添えられているが、「子供のため」の「子供」はワイマル公国のプリンスのことである。もっとも写本の時代ではないから、印刷されて他の貴族の「子供たち」もこの絵本を手にしていたことはたしかであるが。

ハプスブルク家の幼児教育について少し調べてみたこと⁽⁴⁾があったが、例えば「最後の騎士」と呼ばれたマクシミリアン一世は、自らの手による『騎士トイアーダング』⁽⁵⁾から娘ヨハンナのための「教科書」を作成させ、読むことの勉強とともにハプスブルク家の歴史も同時に学ばせたということだが、このときはもちろん写本の時代だから、この「教科書」はたった1冊しかこの世には存在しないはずである。とはいえ、写本として複製されていること

も十分に考えられる。

ベルトーフの『子供のための絵本』が興味深いのは、この絵本が刊行された時期にゲーテがワイマル公国の宮廷顧問官をしていたことである。万能の天才と称されるゲーテが自然科学、とりわけ動物や植物にひとかならぬ興味を抱いていたことは周知の事実である。それはもちろんゲーテに限ったことではなく、博物学⁶⁾がこの時代の流行現象だったとさえいいだろう。「子供のため」として出版されたこの絵本の精緻な図版は、ゲーテに代表される当時の「学識ある人たち」にとっても興味深いものであったことはたしかである。

その証拠として、12巻の『絵本』に対して24巻もの『解説書』が刊行されているが、これには「両親と教師のためのコメントール」という副題がついているのである。両親と教師はこのコメントールを熟読したうえで、子供たちや生徒たちに説明したりその質問に答えたりしたのであろう。

なお、12巻の『絵本』はもともとは冊子として出版されたものだから、この24巻の『解説書』の第1巻は『絵本』の第1冊子から第10冊子までについてのコメントールになっている。『解説書』の1巻ごとに『絵本』の10冊子についてのコメントールが掲載されているから、第24巻は『絵本』の第231冊子から第240冊子までのコメントールになっている。『絵本』は1794年頃に第1冊子が刊行され、1830年まで刊行が続けられているから、40年あまりで240冊子、平均すると年に6冊のペースで刊行されたことになる。一方、この『絵本』に対する大人向けの『解説書』はそれよりかなり遅れて1798年に刊行が開始され、1833年まで刊行が続いている。

本論では、この膨大な『絵本』とその『解説書』のすべてについて調査しそれについて論じることは不可能なので、今後順次やっていきたいと考えている。

I ランダムな図鑑

すでに冒頭で述べたように、この『子供のための絵本』は「絵本」と名付けられているが言葉のふつうの意味での「絵本」ではなく、むしろ「図鑑」である。もちろん「図鑑」特有の精緻な図がカラーで描かれており、それが印刷・出版されているほかに、ラテン文字で印刷された子供向けの説明があり、季刊誌として出版されていたこの冊子の図版を眺めながら、その説明を子供たちは読むのである。

1冊子は5枚の図版と5枚の解説という構成になっている。図版が1頁に収まっているのは当然のこととして、それに対する解説が見開きになった次の頁に、1頁に収まるとともに余白がないように書かれている。しかも、ヨーロッパで共通して用いられているラテン文字である。これらすべては、ベルトーフが前書き⁽⁷⁾で述べているようにすべてが意図されたことなのである。

この絵本の全体をざっと眺めてみると、『動物図鑑』『植物図鑑』『鳥類図鑑』『爬虫類・両生類図鑑』『魚類図鑑』『昆虫図鑑』『鉱物図鑑』『微生物図鑑』『天文図鑑』『神話伝説図鑑』『外国文化図鑑』とでも呼ぶべき「図鑑」とそれについての解説が、一見したところランダムに並んでいる。もちろんこれも意図されたことであり、われわれを取り巻く「自然」を少しずつ目に見える形で子供たちに示すのである。とりわけ、この『絵本』が刊行され始めたときには、この冊子を繙く子供たちがまだ幼いことでもあるし、「自然」のなかから子供たちの興味を引く対象を順次ピックアップして提示することで、その興味を次の冊子に繋げていくという配慮がなされていると考えられる。

最初の冊子の最初の頁には、「熱い国々の4本足の動物」として、正確な象と駱駝の図が掲載されている。「百獣の王ライオン」でも、一角獣のモデルと

されることもあるサイでもなく、象と駱駝がトップに選ばれたのはなぜだろうか。子供向けの解説を読んでみることにしよう。

象はすべての陸上動物で最大であり、10ないし14フースの高さ、16 1/2 フースの長さである。200年近く生きる。馬よりも頭がよく、犬のように忠実で、猿のように器用である。というのも、腕や手のかわりになっている鼻によって、とても重い荷物を持ちあげたり、身を守ったりしているからだ。⁽⁸⁾

象はまずこのように紹介されている。陸上の動物で最大だが、馬や犬や猿と比較することで、滅多に目にすることのできないこの動物を子供たちにとって身近なものにしている。また、アフリカとアジアに生息しているという、アフリカ象とインド象というわれわれにとっては常識的な知識についても言及があり、「東インドでは、象は舟や車を引いたり荷物を運んだりするが、その荷物を鼻が持ち上げたり下げたりするのを助け、人が指示した場所にきちんと置いている。象は2000ポンドのものを運ぶことができる」⁽⁹⁾とインド象のことがとくに取りあげられて記されている。

次に同じ頁にあるのは駱駝である。インド象も現地の人たち利用しているが、駱駝はもうすでに家畜となっていることが次のように記されている。

駱駝も同様にアフリカとアジアの非常に暑い地域にしか生息していない、そしてすべての家畜のなかでもっとも有用である。というのももはや野生に生息しているものが見つけられなくなっているからである。駱

駝がいなければ、エジプトやシリアやアラビアの大部分が人の住まない地域になってしまうであろう⁽¹⁰⁾。

ヨーロッパにとってアラビアやエジプトはすぐ「隣の」異境である。歴史的にみると、いろいろな確執があり、この「絵本」が刊行されているあいだに、ナポレオンのエジプト遠征もあり、あの有名なロゼッタストーンはそのときに発見されている。ドイツ文学研究者という立場からすると、ヴィルヘルム・ハウフのメルヘン『隊商』が思い出されるが、この『絵本』にも、「駱駝は隊商とともに、非常に暑い砂漠を水を飲むことなく長い旅に出る」⁽¹¹⁾と説明されている。さらに、「駱駝の毛は羊毛よりも柔らかく、よく知られた上質なキャメロットに用いられる。若い駱駝の肉は味が良く、その乳は人間にも馬にも栄養として用いられている」⁽¹²⁾と、その隊商たちにとっての有用性が指摘されている。

このように、子供向けにわずか1頁、しかもピッタリと1頁に収まるように説明が書かれているのとは対照的に、大人向けの『解説書』では象の記述だけで27頁⁽¹³⁾もの丁寧な説明がされている。しかも文字は、子供向けのラテン文字ではなく、ドイツ語独特のFrakturであり、これを読む親たちや教師たちへの配慮がなされている。さらに、象の学名である *Elephas maximus* が、こちらはラテン文字で書き添えられている。

子供向けの説明では、象の大きさや体色といった外形的特徴、人間との関わりなどが記述されているのに対して、大人向けの解説では最初の頁に旧約聖書の『ヨブ記』の記述が紹介されている。神はどうやら、象を動物の最初に創造したということなのである。そうすると、この『絵本』が象から始められている理由もよくわかる。「聖書に帰れ」というルターのある有名な言葉

の通りである。

駱駝について⁽¹⁴⁾も大人向けの解説では、まずは学名である *Camelus* が象のときと同様に、ラテン文字で示されている。われわれの知識では、駱駝にもヒトコブラクダとフタコブラクダの2種類があることが知られている。この大人向けの解説にも、*Camelus Bactrianus* と *Camelus Dromedarius* の2種類の学名が記述開始とほぼ同時に紹介されている。子供たちは『絵本』に描かれた1種類⁽¹⁵⁾を見ているが、親や教師は「駱駝にも2種類あるのだよ」とその知識をひけらかすことができるようになってきている。もちろん、博物学が盛んだったこの時代にあって、学識のある大人たちにとってもこの解説は興味深いものであったことは間違いない。

1冊目の最初の2頁にはこのように、象と駱駝が登場するが、次の頁にはやはり「熱帯地方の4本足の動物」として、サイ、シマウマの牡と牝、インドのハリネズミ、そして「鹿と豚の中間種」⁽¹⁶⁾とされるバビルツサという奇妙な動物が描かれている。

サイについては、*Rhinoceros* という学名の下に、サイの呼び名としてドイツ語で一般的な *Nashorn* が記されている。サイについては、角が1本のものと同様に2本のものがあることがわれわれの知識にあるが、子供向けの説明にも「鼻の上に1本、しばしば2本の短い角をもち、それを身を守るために用いている」⁽¹⁷⁾とある。子供向けの絵本に掲載されているのだから、あえて種を分けずにこのような説明で済ませているのであろう。

ちなみに大人向けの『解説書』では、通用名の *Nashorn* が最初に置かれていて、学名の *Rhinoceros* はその下にカッコをつけて記されている。解説の最初は、「すべての本質的な特徴と固有性が他の点では互いに共通しているのに、コブが1つの駱駝と2つの駱駝がいるのと同じように、この種において

も、鼻に1本の角しかないものと2本の角をもつものがある。』⁽¹⁸⁾と記述されている。

また、サイは鼻の上に角があるので攻撃的な動物かという、じつはそうではなくて、「象ということになっているサイの宿敵は、たんなる寓話であるにすぎない。というのはサイはすべての動物と平和のなかに生きていて、興奮させられたときのみ自分の身を守るのである。』⁽¹⁹⁾と子供向けの説明には書かれている。全身固い甲冑に覆われてしかも角をもったサイは、図を見るかぎりでは恐ろしい動物のように見えるが、見かけと実体との相違ということについては、まさに同時代のドイツ・ロマン派の特徴と重なり合う。

ハリネズミについてとくに「インドの」と付け加えられているのは、「ハリネズミは地球上のすべての暑い地域に生息しているが、しばしばイタリアでも見られる。』⁽²⁰⁾からである。実際、このインドハリネズミとは別の種かもしれないが、筆者自身プラハでハリネズミを目撃したことがある。

次の頁は、「飛ばない鳥』⁽²¹⁾として、ダチョウやペンギンなどが載せられている。小夜啼鳥をはじめとして、ヨーロッパでは何種類もの鳥を見たりその鳴き声を聞いたりすることができ、文学作品にもしばしばその姿が描かれているが、この『絵本』ではふだんは見ることのできない、しかも空を飛ぶことのできない鳥が紹介されている。しかもドードーもここに描かれているし、「暑い東インド諸島に生息している」と説明されているが、ドードーは大航海時代のヨーロッパ人による乱獲により、この時点にはすでに絶滅していたはずだが、ふだんは目にすることができないという点では、ヨーロッパから見て遠い世界の生き物も絶滅した種も同じように扱われている。

なお、大人向けの『解説書』では「今やすでに絶滅したと言われているこの両島のほかに、まだインド洋の他の島々に生息しているかどうかは知られ

ていない」⁽²²⁾と記されているのは興味深い。日本やヨーロッパで狼がすでに絶滅しているとされているが、その一方で日本では絶滅したとされるカウソを見たという証言が稀にあることを考えると、この『解説書』の文言の奥深さをあらためて感じてしまう。

次の頁は、陸上から海に観察対象が移り、3種類の「鯨」が紹介されている。陸上で最大の動物である象とならんで、海中で最大、もちろん陸海合わせても最大の動物である鯨が最初に登場するであろうことは予測の範囲にある。鯨をドイツ語では Walfisch といい、海中に生息するから「魚」という名前が付いている。ユダヤ教の戒律によれば「鱗のない魚」は「トレイフ」つまり「不潔」とされて食べることが禁じられているが、この頁に載せられた3種類の「鯨」、クジラとイルカとネズミイルカこそまさに「鱗のない魚」に相当する。

しかし、子供向けの解説には、それぞれの種を説明する前に、「その組織や骨格や呼吸器官や温かい血液、それに子供を育てることから、4本足の陸上動物にとっても近い」⁽²³⁾と書かれている。ここには「哺乳類」という言葉は書かれていないが、クジラやイルカなどは魚類ではなく哺乳類であることは、もちろん現在では常識である。もちろん大人向けの『解説書』では、事細かに魚類と哺乳類との相違点について述べられている⁽²⁴⁾。

第1冊子最後の頁は蚕が昆虫の代表として登場する。昆虫の特徴は変態することであり、蚕については、卵から孵ったばかりの毛の生えた幼虫、その後桑の葉を食べながら何度か脱皮を繰り返す「お蚕様」、そしてそれが全身透き通ったときに繭を作る様子、それに繭のなかにいる蛹、さらに成虫になった蚕蛾とそれが卵を産む姿まで、われわれにとっては小学校のときに蚕を育てる経験をしているから周知のことが丹念に描かれている。この絵本を見た

子供たちは、昆虫のこの変態の様子をどう感じただろうか。

これによって第1冊子の5頁の図版と5頁の解説は終わる。第2冊子もやはり熱帯地方の4本足の動物から始まるが、ここではキリンの牡と牝が描かれている。「半分馬で、半分駱駝で、半分鹿」⁽²⁵⁾と紹介されているキリンは、よく知られているように地上でもっとも背の高い動物である。第1冊子では象に駱駝にサイにシマウマという、現在では動物園の定番と言える動物が紹介されていたが、第2冊子でもそれに続いてキリンである。なお、現存する世界最古の動物園はマリア＝テレジアの夫である神聖ローマ皇帝フランツ一世がシェーンブルン宮殿に作らせたものであるから、この『絵本』が出版された時点ではすでに動物園はヨーロッパ各地に存在していたはずである。ワイマル公国における動物園については、今回調査できていないが、興味深いテーマであることに間違いはない。

次の頁はまた「鯨」が2種類登場する。アメリカのペリーが「黒船」を率いて日本に現れたのが、捕鯨船の補給のための港を日本のどこかに確保するためだったという口実だが、これはどうやらマッコウジラだったと考えられる。第2冊子に描かれた鯨は、Pottfisch という名前からするとこのマッコウジラである。

次の頁には8種類の猿が登場する。オラウータン、手長猿、マルゴット、マンドリルなどがそれで、まだゴリラやチンパンジーなどは登場しない。いずれ、人間にもっとも近いとされるこれらの猿が出てくるのだろうが、この冊子が刊行され始めてまだ2冊目だから先は長い。

猿の次にくるのはもちろん鳥類ということになるが、今度はアメリカの鳥類が10種類描かれている。ヨーロッパで子供たちが身近に接する鳥はまだ先になっている。最後の頁は、今度は昆虫ではなく植物で、やはり熱帯地方の

植物である。ヨーロッパ人にとって熱帯というのが一種の憧れでもあっただろうことを、ここから窺い知ることができる。さて、その植物だが、コーヒーの木とサトウキビであるというのがなかなか面白い。

これでようやく冊子2つ分、10頁について簡単に紹介し検討してみたが、まだまだ先は長い。この世界に存在する動物や植物や鉱物など、ありとあらゆるものを子供たちに見せようとするのだから、当然のことではあるが。第3冊目は動植物の世界から離れて、9種類の金属から始まる。金属といえばもちろん金・銀・銅ということになるが、この『絵本』でもやはりそういう順番で出てくる。最初に導入のための説明が書かれている。

例えば、ここに描かれている金は、ふつうに見られる金ではなく、鉱石の状態の金である。銀は2つの図が描かれているが、ひとつは金の鉱石と同じような銀の鉱石で、もうひとつは sogenannte Baum-Silver⁽²⁶⁾ という銀の元素が結晶したものである。そして銅には3つの図が描かれている。金・銀・銅の次には錫がくるのだが、これも図は3つある。動植物とはまったく異なる世界に子供たちはどんな感動をもっただろうか。ドイツ・ロマン派の代表とも言える詩人ノヴァーリスが、父親から鉱山の監督の職を継いだことがここで思い出される。

次の頁も金属と半金属で、鉛、鉄、水銀、亜鉛、アンチモンである。亜鉛の説明に、「火のなかで容易に溶ける。すべての金属と好んで融和する」⁽²⁷⁾とあるところから、「半金属」と呼ばれるものの性質がわかる。

次の頁は「4種類の驚くべき魚」で、魚なのに空を飛ぶことのできる飛び魚や、船底に張り付くことのできる小判鮫などが描かれている。4頁目は蜜蜂で、これは農家で必ず飼育されている昆虫だが、その生態について図とともに詳しい説明がつけられている。そして第3分冊の最後は、「熱帯地方の危

険な昆虫」⁽²⁸⁾として、毒蜘蛛やタランチュラ、数種類の蠍などがあがっている。もちろんこれらは「昆虫」ではないのだが。

このように、ふだん目にするのできない「自然」のなかのさまざまな生物や事物が、一見ランダムに配置されているのがこの『子供のための絵本』ということになる。ここでまだはっきりと断言することはできないが、このランダムな配置にはあきらかに編者の意図が隠されている。それについては、全巻を精査したのちに結論づけたい。

Ⅱ 「自然」から「技術」への飛躍

ひとつひとつ取りあげていくのはなかなか興味深いのだが、このようにこの『絵本』は入れ替わり立ち替わり、子供たちの興味を引きつけるような構成で編纂されている。それらを簡単に紹介するだけでも本論の紙数はすぐに尽きてしまうので、こういう自然界の生物や無生物の次に何が現れるかを見ておくことにしよう。

第15分冊の4頁には、「建築技術の根源と形成」⁽²⁹⁾として、NaturからKunstへの飛躍が試みられている。「最初の人類はたぶん崖の洞窟に住んでいたであろう」⁽³⁰⁾と推測されているが、建築という技術は自然のなかで、自然と向き合いつつまた自然を破壊して発展してきた。この『絵本』を読んでいる子供たちも、われわれと同じようにもう自然のなかで自然と溶け合いながら生きているわけではない。

ドイツ語圏で産業革命が飛躍的に発展するにはまだもう少しばかり待たねばならないが、とりあえずここで、原初の建築物とギリシャ・ローマ時代の建築物が紹介されている。古代ギリシャの建築様式が、ドリス式、イオニア式、

コリント式であることはわれわれも承知しているが、この『絵本』ではまさにそれらの様式の建築物が再現されている。とくに、ギリシャ建築の様式は柱の上の部分で区別されるが、それぞれの建築物のすぐ横にその部分が拡大されて見やすくなっている。また、古代ギリシャに続くローマの建築様式とそれらが融合した様式も示されている。ここにまた古代ギリシャとローマをルーツとするヨーロッパというものが見えてくる。

この第15分冊はふたたび「自然」に戻り、Laternenträgerという名前の巨大な蛾とその蛹、バッタやカマキリや蟬が描かれている。巨大なカブトムシであるヘラクレスコガネはもちろんヨーロッパには生息していないが、これらの昆虫に混じって Maykäfer とその幼虫が頁の隅にそっと置かれていることは興味深い。というのも、このコガネムシはヨーロッパにも生息しており、文学作品にもたまに登場しているからだ。

このあとしばらくは「自然」が続くが、人工の建造物はかなりしてから「世界の七不思議」⁽³¹⁾として登場する。人工の建造物ではあるが、ギリシャやローマの建築物とは違って、いつ誰がどのようにして建造したのか、謎に包まれている。その七不思議の最初はもちろんエジプトのピラミッドであるが、面白いことにその内部を示す図も添えられている。さらに興味深いのは、ピラミッドの外の道を通っている駱駝と人であり、この『絵本』の最初の頁におおきく描かれていた駱駝とここでまた出会うことになる。

七不思議の2番目はバビロンの空中庭園、3番目はやはりバビロンの市壁である。市壁の内部にはバベルの塔を思わせる高い塔が立っているが、説明でもやはりこれがバベルの塔⁽³²⁾であるとされている。この同じ頁には七不思議の4番目であるマウソーレウムが描かれているが、これはペルシャのクセルクセス王の時代に生きていたカーリエン王マウソルスの墓碑である⁽³³⁾と説

明されている。子供たちは、ただ技術の素晴らしさをここに見るだけではなく、古代の「物語」も知るのである。

この冊子の最後の頁には七不思議の最後の3つが描かれている。5番目はロードス島のコロスで、港に停泊している船舶をまたぐ巨大な神像に驚かされる。6番目はオリンピアのユピテル、7番目はエフェソスのディアーナ神殿であり、七不思議もここまで来るとヨーロッパのルーツにつながり、この『絵本』を繙く子供たちは、自分たちの文明の根源に到る思いがしたことであろう。この頁で第14冊子が終わり、次からはまた「自然」に戻るのだが、その最初はインディゴなど染色に用いられる植物⁽³⁴⁾であり、「自然」と「技術」との絶妙のマッチングが見える。

頁はかなり戻ることになるが、第10冊子からはドイツ語の説明の裏に、フランス語の記述があり、子供たちはフランス語も同時に学ぶことができるようになっていく。また、この頁は暑い地域の植物として綿花と茶の木⁽³⁵⁾が掲載されていて、「自然」と「技術」との融合がすでにフランス語での説明とともに始まっていたのである。『絵本』を読む子供たちはこの時点ではもうかなり成長しており、貴族社会の共通語であるフランス語を学ぶとともに、「自然」と人間との関わりへの視線を持つように教育され始めたと考えられよう。

それと関連して、次の頁は南の果実⁽³⁶⁾であり、しかもフランス語の説明が先にあり、ドイツ語はその裏の頁になっている。これらの南の果実のうちで最初に挙げられているのはもちろん、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の「ミニヨンの歌」に出てくるレモンである。この頁のあとからはまたドイツ語・フランス語の順に戻っているから、この頁は意図的なものであったのかあるいは単純なミスだったのか、それは不明である。

冊子に描かれた絵がまた自然に存在するものに戻るのだが、第11冊子には「われわれの新しい自然史では知られていない奇妙な動物、古代の詩人や物語作者の作品ならびにアラビアのメルヘン、騎士物語や伝説にある奇妙な動物は、幻想の生み出したものであり、存在したことの無い寓話的な動物である。」⁽³⁷⁾として、ケンタウロス、キメーラ、ギリシャのスフィンクスとエジプトのスフィンクス、シレーネなどが描かれている。同じスフィンクスでも、ギリシャとエジプトとではずいぶん違って、ギリシャのスフィンクスは女性の顔をしている。オイデプスはこちらのスフィンクスの謎を解いたのだとわかる。

次の頁にもハルプユイア、グリフォン、サテュルヌス、タイタン、海馬、トリトンなどやはり寓話的な動物、さらに次の頁にはバジリスク、フェニックス、ユニコーン、ドラゴンなどが描かれている。これらの「怪物」たちとは、われわれもいろいろなところで出会っているが、人間の創造力が生み出したこれらの「怪物」たちは、もちろん自然界には存在していない。ただ、これらの「怪物」たちを形成している各部分は現実の動物の部分と一致していることが多い。

ここで怪物論を展開している余裕はないが、自然界に現実には存在しないこれらのものは、人間の想像力つまり「自然」を模倣しつつそれを越えようとする「技術」の一形態なのではないだろうか、ふと思いついてしまう。この『絵本』の冊子をここまで読んできた子供たちは、これらの「怪物」たちと出会って何を考えただろうか。もちろん、子供たちは神話や伝説も読んでいたことだろうから、きっとこれらの図に出会って心をときめかせたにちがいない。

Ⅲ 異文化への視線

人間の世界を取り囲む、人間にはどうすることもできない自然、そしてこの自然から与えられたであろう人間の知と力を結集した技術で自然に立ち向かう人間、『絵本』を読み進める子供たちは、その大きな流れに身を任せたことだろう。それが古代から連綿と引き継がれてきた人間の文化というものに違いない。この『絵本』の大部分は自然界に存在する動植物や鉱物など、いわゆる博物学的資料になっている。

その中から人間の生み出してきた文化への視線が生じるのは、自然の成り行きであろう。この『絵本』では第16冊子に、その「文化」のひとつの典型として衣装が登場する。「人間は地上全体に広がっていて、そのNaturはそれぞれの環境に適応するように向けられている。」⁽³⁸⁾との説明から始まる。ここでNaturをあえて日本語に訳さないでそのままにしたが、この『絵本』がヨーロッパの人々にとって遠い熱帯に生息する象や駱駝のような動物から始まったことを考慮すると、子供たちに、もちろん『絵本』の『解説書』を読む大人たちにも、Naturに目を向けさせる意図があることは確かである。

「ヨーロッパの人々」⁽³⁹⁾として4組の男女と1人の武器を持った男性が描かれている。最初の男女は「フランス人」、次の男女は「イギリス人」とあるが、これを比較して何を言えばいいのか、ともかくその対比がなかなか面白い。この『絵本』が出版されたのはフランス革命以降だが、「フランス人」としてここに描かれている男女の衣装はわれわれも知っている宮廷社会のものだ。それに対してイギリス人は、男女ともに帽子をかぶっており、このような衣装はあまり見たことがない。

この2組の男女の真ん中に武器を持って立っている男性は、「軍事的な民族

衣装を着た山岳スコットランド人⁽⁴⁰⁾とある。この5人の下に描かれている2組の男女はとともヨーロッパ人に見えないが、1組は「トルコ人」、別の1組は北極圏に住む「サモワール人」である。ここで気がつくことは、それぞれの衣装だけではなく、それぞれの背の高さが違っていることである。イギリス人とスコットランド人とフランス人が並んでいるが、フランス人は小さくて華奢である。トルコ人は背が高いたけではなく男女ともに恰幅がよい。サモワール人はトルコ人の隣に描かれているからよけいに小さく見えてしまう。ヨーロッパに住む人々にもそれぞれの自然環境が衣装だけではなく姿形に影響していることがわかる。つまり人間もまた、これまでにこの『絵本』で見てきたような動植物と同じように、その「生息する」自然環境の被造物ということになる。この『絵本』はワイマル公国の子供たちのために出版されたものであるから、同じヨーロッパでもドイツとは違う別の「自然」と「文化」に暮らす人々の姿を、子供たちは興味深く眺めたことだろう。

次の頁は「アジアの人々」⁽⁴¹⁾として4組の男女が描かれている。「東インド人」、「シベリア人」、「カルミューク人」、「アラビア人」の4組である。なお「カルミューク人」と呼ばれているのは、説明文から判断するとモンゴル系のアジア人らしい。トルコ人がヨーロッパに属している一方、アラビア人はアジア人であるというのも興味深い。また、われわれ日本人や中国人がここに描かれていないことも、ヨーロッパ人にとっての「アジア」ということを思い起こさせてくれる。もちろん、この冊子はまだまだ先が長いので、日本人もいずれは登場することになるが、それはまた稿を改めて紹介することにする。

次に「アフリカの人々」⁽⁴²⁾が登場する。ここでもまた4組の男女が描かれているが、「エジプト人」はアラビア人と似ている。「ホッテントット」は比

較的よく知られているが、ほとんど裸の体にマントのようなものを羽織っている。これらの下に描かれている「ゴナーク人」と「カッサー人」はどちらも裸同然で、黒人である。

次は「アメリカの人々」⁽⁴³⁾ということになるが、北アメリカから南アメリカまで南北に広がっているアメリカ大陸にはさまざまな人々が生きてきた。かつて「インディアン」と呼ばれた人たちがいたが、ここではそれに当たる人たちは紹介されていない。そのかわり「グリーンランド人」がここに入っている。そのほかに「アラスカ人」、「ヴァージニア人」、「パタゴニア人」、「フォイヤーラント人」と続く。

五大陸の最後の住民として「オーストラリアの人々」⁽⁴⁴⁾が、この冊子の最後の頁に置かれている。この第16冊子はこれまでとは違って、すべての頁が世界各地に生きている人々とその衣装ということになっている。これはひとつの工夫であり、人間とその文化がいかに多様なものであるかを、子供たちは知ることになる。なお、4種類のオーストラリアの原住民が描かれているが、現在もここに描かれているようなオーストラリア人やニュージーランド人が住んでいるのかと、はなはだ疑問になる。

次の第17冊子には、この当時の文化ないし文明の最大の産物である船舶が、2頁にわたって紹介されている。最初は大型の船舶だが、ドイツ語ではLinienschiff⁽⁴⁵⁾とあり、一般的には定期船ということなのだが、帆船のLinienschiffは戦艦ということになるらしい。外見だけではなく内部も紹介されている。

次の頁には2隻の船の絵⁽⁴⁶⁾が描かれていて、戦艦に比べるとかなり小さい。上にあるのは「ガレー船」で、これも戦争に用いられる船だが、一応帆船ではあるものの原動力は基本的には船底にいる人間である。別名「奴隷船」

とも呼ばれているが、この原動力としての人間は「奴隷」でない限りその過酷さに耐えられるものではないようだ。次は「フリゲート艦」だが、これも戦争に用いられる小型の船で、この名前は今でも残っている。

このように、『絵本』の最初に登場する船舶はすべて戦争のための艦船である。この冊子が刊行されたのは世紀が変わって19世紀初めということになるが、ヨーロッパでは陸上でも海上でも戦闘が繰り広げられていた時代である。この『絵本』を読んでいる貴族の子供たちは、いずれはその戦争に将官として参加することになるだろうから、「文明の利器」の最初に登場するのが戦争のための艦船であることにも、意味があっただろう。

少し飛んで第18冊子にも船⁽⁴⁷⁾が登場するが、こちらは小型の船で、「ヨット」とSchaluppeと「ゴンドラ」である。Schaluppeというのは北欧で貨物輸送に用いられた帆船のことでもあるが、ここでは『絵本』に描かれた絵からするとオールで漕いで大型の船から荷物を陸に運ぶ「ランチ」である。

『絵本』を精査するつもりでここまで読み解いてきたが、この『絵本』に描かれた「自然」への旅はまだその途に就いたばかりという感じである。30年以上にもわたって、その当時の叡智を集めて制作されたこの『絵本』は、言葉のふつうの意味での絵本ではない。

12巻の『絵本』のうちの第1巻をざっと眺めてみてさえ、これだけの「資料」が所蔵されている。いや、本稿で言及しなかった、言及できなかったことがこの第1巻の中にさえどれほど残されていることだろうか。

駱駝はすでに最初の頁に象とともに登場していたが、船舶が載っている冊子の次の第18冊子の最初に「さまざまな駱駝」⁽⁴⁸⁾として再度登場する。生物の分類学上「ラクダ」の仲間とされるものがあるからで、『絵本』はますます精緻になっていく。

おわりに

「自然」はきっと無限なのだろう。人類はこれまで自然破壊をしてきた。それがまた人類の文化ないし文明の歩んで来た道である。最近になって自然保護が叫ばれている。また絶滅危惧種が指定され、その保護にも力が入れている。しかし「自然」は、人類がそのすべてを破壊できるほど小さなものではなく、逆に人類が保護できるほど小さなものでもない。

1800年前後の時代は、ドイツ・ロマン派と古典派がひとつのピークを迎えた時代である。古典派の代表であるゲーテは、文学や芸術のみならず、自然科学にもおおいに興味をもち、その研究とその成果をいくつかの著作に残している。この『絵本』はちょうどその時代に刊行され始めた。しかも、ゲーテのいたワイマル公国なのである。

そこに何かおおきな運命的な力の働きを感じてしまうが、この『絵本』の刊行の最終年は1830年で、ゲーテが1832年に死んでいるから、ちょうどそれと重なり合う。また、ドイツ文学史では1830年を「芸術時代の終わり」と名付けているから、それともちょうど符合している。

この『絵本』を最初に手にした子供たちは、その頃にはすでに壮年になり、『絵本』ではなくその『解説書』を手にして、自分の子供たちに講釈をしたかもしれない。成城大学特別研究を2年間受けて、今年で3年が過ぎようとしている。研究費を受けたのだから研究成果を公刊する義務があり、ついにこうしてそれに踏み切ってみた。

これまで私が専門にしてきたドイツ語ドイツ文学とは違う世界がここにあったが、しかしその一方で、私自身が子供時代に『絵本』ではなく『図鑑』に慣れ親しんだことを思い返してみると、ベルトゥーフの『絵本』は、私自

自身が自分の未来について何も知らないまま、親に買ってもらった何冊もの『図鑑』の図を毎日繰り返し眺めたあの日々につながるものがある。

本稿にはあえて「(1)」という番号を振らせてもらった。この『絵本』に描かれた「自然」はまだまだ広大すぎるからである。今後、私自身の研究から、「(2)」や「(3)」……さらに多くの成果が生まれてくるであろうことを期待したい。

(了)

拙稿は2015・16年度に受けた成城大学教員特別研究による研究成果の一端を公開するものである。

注

- (1) Bilderbuch für Kinder: enthaltend eine angenehme Sammlung von Thieren, Pflanzen, Blumen, Früchten, Mineralien, Trachten und allerhand andern unterrichtenden Gegenständen aus dem Reiche der Natur, der Künste und Wissenschaften: alle nach den besten Originalen gewählt, gestochen, und mit einer kurzen wissenschaftlichen, und den Vestandes-Kräften eines Kindes angemessenen Erklärung begleitet von F. J. Bertuch. Weimar: In dem privil. Industrie-Comptoir, 1794 (?)–1830.
- (2) L.Ph.Funke: Ausführlicher Text zu Bertuchs Bilderbuche für Kinder: Ein Commentar für Eltern und Lehrer, welche sich jenes Werks bei dem Unterricht ihrer Kinder und Schüler bedienen wollen. Weimar: Im Verlage des Indurtrie-Comptoirs, 1798–1833.
- (3) Seiner Durchlaucht dem Herrn Erbprinzen Carl Friedrich zu Sachsen Weimar und Eisenach zugeeignet. Bilder Buch für Kinder, Bd.1.
- (4) Vgl. Sabine Weiss: Zur Herrschaft geboren: Kindheit und Jugend im Haus Habsburg von Kaiser Maximilian bis Kronprinz Rudolf. Innsbruck/Wien: Tyloria, 2008.
- (5) Kaiser Maximilians Theuerdank. (Facsimile of the first 1517 edition) Pochingen/Stuttgart: Müller und Schindler, 1968.
- (6) 西村三郎『文明の中の博物学 西欧と日本 〈上・下〉』紀伊國屋書店、2003年、参照。

- (7) Bilderbuch für Kinder, Bd.1, S.1-S.6. なおこの部分は Vorwort ではなく、Plan, Ankündigung und Vorbericht des Werks というタイトルになっている。
- (8) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.1.
- (9) Ebd.
- (10) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.2.
- (11) Ebd.
- (12) Ebd.
- (13) Ausführlicher Text, Bd.1, S.1-S.26.
- (14) A.a.O., S.26-S.37.
- (15) これはどうやらフタコブラクダのようで、ちょうど人がそのコブのあいだに乗れるようになっている。
- (16) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.5.
- (17) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.3.
- (18) Ausführlicher Text, Bd.1, S.34.
- (19) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.2.
- (20) Ebd.
- (21) Bilderbuch für Kinder, Bd.1. No.3.
- (22) Ausführlicher Text, Bd.1, S.54.
- (23) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.4.
- (24) Ausführlicher Text, Bd.1, S.60ff.
- (25) Bilderbuch für Kinder, Bd.1. No.6.
- (26) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.11.
- (27) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.12.
- (28) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.15.
- (29) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.59.
- (30) Ebd.
- (31) Bilderbuch für Kinder, T.1. No.68.
- (32) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.69.
- (33) Ebd.
- (34) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.71.
- (35) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.46.
- (36) Bilderbuch für Kinder, T.1. No.47.

- (37) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.57.
- (38) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.76.
- (39) Ebd.
- (40) Ebd.
- (41) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.77.
- (42) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.78.
- (43) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.79.
- (44) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.80.
- (45) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.81.
- (46) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.82.
- (47) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.88.
- (48) Bilderbuch für Kinder, B.1. No.86.